

The New England PRIMER と アメリカ・ピューリタンの育成

鈴 木 進

は じ め に

ホーソー(Nathaniel Hawthorne)の *The Scarlet Letter*, Chap.VIIから Chap.VIIIにかけて、Hester が刺繍をした手袋を Governor Bellingham に届けに行く場面がある。Pearl も一緒である。知事邸では、ちょうどその時知事たちが、Pearl をキリスト教徒として教育することについて相談をしているところであった。Governor Bellingham は Wilson 牧師に次のように依頼する。“…I pray you, examine this Pearl, —, and see whether she had had such Christian nurture as befits a child of her age.”そこで Wilson 師が Pearl をテストする。“…Canst thou tell me, my child, who made thee?”これが17世紀ニューイングランド・ピューリタン社会では、3才の幼児に求められる標準的質問であったのであろう。Pearl は正しく答えられるだけの教えを Hester によって授けられていたが、あのつむじ曲り(that perversity)に彼女の心を占領され、口を閉ざしてしまう。作者は、その問答が書かれている『ニューイングランド初等教科書』(The New England PRIMER)や『ウェストミンスター教理問答書』(The Westminster Catechisms)の初めの方なら Pearl は充分答えられるはずだ。もっとも、その有名な二つの書物がどんな形の本なのかは知らなかったのだが⁽¹⁾と付け加えている。

17世紀のマサチューセッツ湾植民地においては、わずか3才の子供でさえ熟知していなければならなかった教えとは何であったのか。ニューイングランド・ピューリタンのすべての人に共通した知識を授けた国民の教科書、The New England PRIMER という書物とそこに目指された人間像を探ることに筆者は興味をおぼえた。

初等教育の教科書が一国の国民の形成に大きく影響した例はわれわれの身近に知るところである。教科書がそれぞれの国のそれぞれの時代の理想像を反映することが多いからである。そこで筆者は、初期アメリカ植民地において、ピューリタンによる Bible Commonwealth のいわば国定教科書ともいべき The New England PRIMER (その中に Westminster Catechism も含まれている) とはいかなる書物であったのか、またそれはピューリタニズムの形成にどのような影響

(1) チャールズ・ライスカンプの論文「『スカーレット・レター』のニューイングランドよりの取材」によればヘスターがリチャード・ベリンガム邸を訪ねた記事は1645年の晩夏の出来事である、と推定している。もしそれが正しいとすれば、The New England PRIMER も Westminster Catechism もこの時期にはまだ出版されていないので、書物として見ることは出来なかったと書いたであろう。

を与えたのかを考察してみたいと思う。

ニューイングランド植民地（この小論では主として Massachusetts Bay Colony を指す）では信仰的にはカルヴィニズムに基づく教義、教会形態としては会衆派または組合教会(Congregational Church)を唯一の国教(established church)とする聖書共和国であった。そこにおいて国民の教育が“*the textbook*”とも称すべき New England PRIMER によってなされたことはアメリカ・ピューリタニズムを考える時、見落すことの出来ない重要な問題であろうと考える。New England PRIMER の名前はわが国の多くのアメリカ文学史の書物の中にも見ることができる。そして有名な“In Adam’s Fall We Sinned all”がピューリタンの教えの典型として引用されることもしばしばある。しかし New England PRIMER の中心はそれよりもむしろ『ウエストミンスター小教理問答書』をそのままの形で載せた SHORTER CATECHISM にあるのに、その点について触れたものは多くないのではないか。わが国では特定の教派グループによって『ウエストミンスター小教理問答書』の翻訳が数種類出版されているが SHORTER CATECHISM を含む New England PRIMER 全体について紹介する論文、書物を筆者は寡聞にして知らない。

New England PRIMER は17世紀末から約150年間にアメリカ植民地で300万部以上も発行された。しかしそれ程大量に出版されたにもかかわらず、今日アメリカにおいて現存するものは極めて少数にすぎないといわれる。恐らくは、当時の人々が買い求めやすいようにと安価な書物にしたため、印刷や製本が粗雑になったことや、取扱いがあまり丁寧になされなかったために、散逸してしまったものと思われる。

筆者はオリジナルを手にすることは出来なかったが、New England PRIMER のリプリント版2種類、およびいくつかの版の部分的コピー、そして PRIMER の先駆けといわれる Horn Book のレプリカを手許に所持している。PRIMER は一世紀半の間に多くの版が出版されたが、筆者の手許にあるリプリント版はアメリカに現存する最も古い版（1727年の Lenox Library 版）と1785～1790年の間に発行されたと推定される版の Facsimile である。この二種類の出版には、約60年の時間の隔りがある。その間にアメリカ人は独立革命を経てイギリス本国との関係が大きく変わってしまった。またアメリカ資本主義へと発展するのと反比例して信仰心の衰えも顕著になる。これらのことから、当然二種類の PRIMER にはその変化のあとを見ることが出来ると思う。

この小論では、初めにピューリタンによるニューイングランド植民地初期の教育、特に初等教育について概観し、次に、初等教育において唯一の教科書として用いられ、それによって何百万人という人々が教育を受けた The New England PRIMER について述べ、その歴史、内容、そしてピューリタニズム形成への影響を1727年発行の Lenox Library 版を中心に考えてみたい。そしてもうひとつの18世紀末の版との違いを、ニューイングランド社会の変化という視点から述べることにする。

I

植民の最初から、アメリカ社会が当面する問題解決への近道を教育に求め、“Education for all”

を掲げてきたアメリカ人は教育史の上で注目すべき国民であろう。ニューイングランド初期ピューリタンが宗教には勿論、教育に対してきわめて熱心であったことは広く知られた事実である。それは宗教と教育というように二つを並列した表現よりもむしろ、宗教のゆえに教育に熱心にならざるを得なかった、というのがより適切な表現であるかもしれない。彼らは神の救いに与るかどうかを知る唯一の手段として、文字を習い、聖書を各自が読まなくてはならなかったから。神の意志はすべて聖書の中に啓示されていると信じ、日常的な規範や人生の本質にかかわることから国家の重大事に至るまで、すべてを聖書の中に求めた。そのようなピューリタンの姿勢を彼らの好んで用いた摂理(providence)というひとつのことばの中にも伺い知ることができよう。

聖書を読む能力と同時に自分の信仰を正しく言語によって表現する能力も彼らに求められた。教会と国家を一体とするピューリタン・コモンウェルスにおいては、市民の一員としての教会員資格は恵みの契約(Covenant of grace)を結んだ者だけに限られていた。彼らはその回心体験を教会の会衆の前で表明して認められなければならなかったのである。自分は新生者(regenerate)であると信じていてもそれをことばによって他人に伝えなければならない。そのためにはかなり高い言語能力と論理的思考の訓練を必要としたことであろう。

このように、ピューリタンにとって聖書の読解と自己表現のための言語教育が現世と死後の世界に欠かせなかった。教育はともかくとして、信仰は本来一人一人に関わる事柄である。しかしニューイングランド・ピューリタンにとっては 教育 のことは個々人に任せてすませられる問題でなかった。イギリスを後に3,000マイルの航海を終え、原始の荒野に植民を開始した彼らがその後生き残れるかどうか教育問題にかかっていたといっても誇張でなかったからである。教育を国家の政策として行い、国家として支えなければならない理由が宗教の他に経済的事情にも見出せる。それはピューリタンの植民したアメリカ北東部の土地という条件が大きな要因として考えられる。ニューイングランドの畑から一番多く採れるものは石ころである、といわれるほど瘠せた土地と厳しい寒さを挙げただけでも、肥沃で温暖な Jamestown Colony とは大いに違った生活形態をとったのは当然のことである。そのような生活条件として極めて恵まれない開拓地に、新たに無教育のゆえに自己一人をも養えない移住者を受入れる余裕はなかった。ピューリタンたちはすでにイギリス本国で見てきたような無知な貧民を抱えることを恐れた⁽²⁾。従って、子弟に教育を受けさせることは親や徒弟を抱える雇主に課せられた責務であると同時に国家の最重要事業であったのだ。

20年以上も前に移住していたヴァージニアの方が、植民の条件としてはるかに恵まれていたにもかかわらずそれに先駆けてマサチューセッツ湾植民地が教育事業を始められたのはなぜだろうか。イギリス人植民者は他の国からの移住者と比較して、教育により関心をもっていたといわれるが、ニューイングランド地方に移住したグループだけがその関心を実行できたのは上に述べた

(2) 梅根 悟監修『世界教育史大系』17 アメリカ教育史Ⅰの第一章、「植民地時代の教育」に教えられた点が多かった。

宗教的、経済的理由の他にニューイングランド特有の町作り、“Town”がもうひとつ大きな要因となった。南部では、たとえば、ヴァージニアにおいてはバークレー知事(Governor Berkley)は1670年本国への手紙に次のように記している。「…自分はヴァージニアに現在公立学校(free school)が無いことを神に感謝する。今後も無い方が良いと思う。なぜなら学問をすると人民が不従順になるから……」⁽³⁾。この知事のことは南部のいち為政者の教育に対する偏見にすぎないであろう。しかしヴァージニアを含むアメリカ南部地方では公立学校を設けようにも地理的に、あるいは産業的にプランテーションが点在する土地であったので、北部に見られるような集落を形成し得ない事情があった。一方、初期マサチューセッツの典型的な町作りは、その中心に教会を置き共有地(common,または green)を含むコンパクトな集落で⁽⁴⁾あって、児童が徒歩で通学できるほど一個所に集中していた。この条件が公教育事業を進める上で有利に作用したものと考えられる。

マサチューセッツ湾植民地にはその他にもうひとつの利点があった。それはイギリス本国にて大学教育を受けた者の数が他の植民地に比べ格段に多かったことである。彼らは新天地に、本国で見てきたすべての過ちを排した理想の国家を築き、英本国へのお手本を示そうとする意気込みで国作りを始めたから、道徳的にも教養においても優れた子弟を養成する教育機関の必要を悟った時に、直ちに彼らの受けた大学教育がそれを可能にした。

最後に、初期マサチューセッツ湾植民地はイギリスからの移住者による Congregational Church の会員のみが国政に参加する、いわば“homogeneous”社会であったことが教育の国家統制を容易にさせた点をも忘れてはならない。

II

ニューイングランドの教育のひとつの特徴は高等教育から始められた点である。1636年マサチューセッツ議会(General Court or Legislature of Massachusetts)は大学創設のため(towards a schoale or college)、400ポンドの支出を認めた。これは植民地歳入の半分に当たる額であった。議会はこの頃、Pequot インディアン戦争、Anne Hutchinson 問題を抱えていたが、John Harvard などの協力に励まされ、1638年夏ケンブリッジの地に新入生を迎えたのだった。1636年という年は John Winthrop を指導者とするピューリタン一行が Shawmutt (のちの Boston) の地に植民を始めたわずか6年後のことである。未開の荒野に衣食住を求める生活の中で大学を作ろうとするピューリタンのエネルギーにわれわれは驚かされる。聖書を正確に解釈し、カルヴィン主義

(3) Alice Morse Earle, *Child Life in Colonial Days*, (New York, Macmillan Company, 1962) pp. 64—65

(4) Louis B. Wright, *THE CULTURAL LIFE OF THE AMERICAN COLONIES*, (HAPPER & ROW, 1962) p. 99

(5) 1646年までにイギリスの大学卒業者のニューイングランドに移住した者の数は130人を下らないという。1646年の同地方の人口は約25,000人。従って40～50家族に一人の大学卒業者がいた計算になる。Samuel Eliot Morison, *The Intellectual Life of Colonial New England*, (Itica, Cornell Univ. Press, 1970) pp. 17—18

の教育に基づく教えを人々に説教するために学問のある牧師とレイマンを養成する機関の必要を痛感したのだった。ハーバード大学創立の事情と目的を今に伝える記録としてケンブリッジの町の大学の門の壁に刻まれた次の文章に見ることができる。

AFTER GOD HAD CARRIED VS SAFE TO NEW ENGLAND
AND WEE HAD BVILDED OVR HOVSES,
PROVIDED NECESSARIES FOR OVR LIVELIHOOD,
REARD CONVINIENT PLACES FOR GOD'S WORSHIP,
AND SETTLED THE CIVILL GOVERNMENT:
ONE OF THE NEXT THINGS WE LONGED FOR,
AND LOOKED AFTER WAS TO ADVANCE LEARNING
AND PERPETVATE IT TO POSTERITY;
DREADING TO LEAVE AN ILLITERATE MINISTRY
TO THE CHVRCHES, WHEN OVR PRESENT MINISTERS
SHALL LIE IN THE DVST.

ハーバード・カレッジ創設に先立つ一年前に Boston's Free Grammar School (Boston Latin School)が設けられた。これはイギリスの grammar school に倣ったもので、主要科目のラテン語(ハーバード大学に進学するための必修科目)、ギリシャ語、数学、宗教を教えた⁽¹⁾。その目指すところは教養豊かなキリスト教徒の育成と、さらに聖職者を志す者たちのため、ハーバード大学への予備教育であった。この学校の教師として1635年ボストン市民は Mr. Philemen Pormont を選ぶが Boston Latin School の名前からわれわれがすぐ思い出す名教師は Ezekiel Cheever である。教え子の Cotton Mather が師のために綴った挽歌の中や、あるいは、Hawthorne の *Grandfather's Chair* の part II、"The Old-Fashioned School"によってチーバーとそこで行なわれた教室風景を想像することができる。彼は38年間その職にあって多くの生徒をキリスト教徒に育てた。

1647年州議会は各 town に対し、「戸数100戸につきラテン文法学校を一校設置すべし、生徒には "as far as they may be filled for the university"」と命じている。これに従わない town には罰金5ポンドを科す⁽²⁾、と規定しているところをみると議会は完全実施が困難なことを予想したのではないだろうか。しかしこの法律によって多くの Latin school が生まれたことは事実であり、ニューイングランドの他の植民地もこれに倣っていった。

制度としては初等教育が一番最後に起こることになる。しかしアメリカ・ピューリタニズムに

(1) Samuel Morison, *Ibid.*, pp. 108—112 に Westminster School と Boston Latin School の1712年のカリキュラムの対照表と Boston とその他の New England Grammar Schools の使用教科書の表が載っている。

(2) Carroll C. Calkins, ed., *THE STORY OF AMERICA* (New York, Reader's Digest Association) p. 126

対する影響という観点から考えるならば高等教育に決して劣らぬ重要性をもっている。大学教育を受ける機会に恵まれた者は当時少数の人々に限られた訳であるから。それに対し、日常生活に必要な最少の読み書きの教育を受けた者の数は男子に限れば、植民地のほぼ全員に近かった。マサチューセッツとコネテカットの二つの植民地について調べた1640年－1700年の男子の文盲率5%以下という調査がある⁽³⁾。このように国民大衆が受けた教育は後に述べるように、文字の読み書きを通しカルヴィニズムの教義を教えるテキスト、The New England PRIMER を用いて行なわれたのであった。アメリカ文化史の上から、ピューリタンが行なった初等教育の重要性は、それが世界に先駆けたアメリカ義務教育の初まりであり、一時期の衰退を経て、やがてホレーズ・マンによる公立学校確立の礎の役目を果たした点にある。

1640年代に Massachusetts General Court は二つの重要な教育法令を発布している。1642年6月14日のものはマサチューセッツ植民地の児童と徒弟に“ability to read & understand the principles of religion & the capitall lawes of this country”を授けるように親と雇い主に義務づけた。カルヴィニズムの教義を教え、あわせて聖書共和国を維持発展させるための教育を目的としたものであろう。1647年には有名な‘old deluder Satan law’が出された。これこそピューリタンの教育理念を明確に表わしているものであるから原文を次に引用する。

“It being one chiefe project of the ould deluder, Satan, to keepe men from the knowledge of the Scriptures, as in former times by keeping them in an unknown tongue, so in these latter times by perswading from the use of tongues, that so at least the true sence & meaning of the originall might be clouded by false glosses of saint seeming deceivers, that learning may not be buried in the grave of our fathers in the church and commonwealth, the Lord assisting our endeavors⁽⁴⁾,—(現代の活字に直した(筆者))

法文はさらに続き、引用のような目的を達するために、すべての児童に読み書きを教える教師を雇い、学校を設置するように町に対して義務づけている。42年の法に比較すると単に“teach all such children as shall resort to him to write & reade”と変わったのは教育の目的を拡大したものと解釈すべきであろうか。

III

17世紀初等教育のカリキュラムは基本的には 3R's (Reading, 'riting,および'rithmetic)を目指したが、この三つの方面が等しく教えられた訳ではなかった。書き方が取り入れられたのは17世紀も末のことであり、算術はさらに遅れて18世紀中葉であった。その理由は貧弱な学校設備とならんで教材教具が不足していたからであろう。Faber の鉛筆が製造されたのは1761年であり、一般

(3) Morison, *Ibid.*, p. 84

(4) Henry S. Commager ed., *DOCUMENTS OF AMERICAN HISTORY*. (New York, Appleton-Century-Crofts Inc. 1968), p. 29

(1) Alice M. Earle, *Ibid.*, p. 78

の人に使用され始めたのはもっと後のことであった⁽¹⁾。鉛筆が用いられる以前には驚ペンと質の悪いインクによらざるを得なかった。紙はもっと少なかったことも書き方と算術教育を遅らせた原因らしいが、ニューイングランド地方では豊富な白樺の樹皮(birch bark)が紙の代用をしたとの記録もある⁽²⁾。

そのような事情からいきおい文字を読む教育が主となったが、ピューリタンの教育の目的は“to read and understand the principles of religion and the capital laws of the country”であったから一応の目標は達せられたのであろう。

植民地初期の時代、17世紀半ば、読み方の教材にはどのような教科書が用いられたのであろうか。移住者たちの持物の中には子供のための書物もあったことであろう。当時のイギリスでは chapman と呼ばれる行商人が一ペニーかそこらで置いてゆく子供向けの書物が流行したが、俗悪なのでピューリタンが嫌ったという。植民地の子供たちが文字と綴りを学んだ最初の書物は book という名がついているものの、われわれの普通いっている本とは大分趣を異にしていた。hornbook がそれであるが、その型から別名 battledore-book, horngig, horn-bat あるいは absey と呼ばれた。このことから連想がつくように、文字が印刷された一枚の紙片を薄い板に貼り、その紙の汚れや破れを防ぐために動物の角を薄く切ったものを上にのせ、角片を真鍮の細い板で押さえたものであった。透明の角片を通して文字が読めるようになっていることから horn-book の名が付いたものと思われる。板の大きさは縦4～5インチ、幅2～3インチで下の方は持ち易いように細くなっていて、西洋マナイタ形であった。

印刷された文字は一番上にアルファベットの小文字が二行にわたり記され、Zのあとの余白に a, e, i, o, u。三行目はアルファベットの大文字。五行目から ab, eb, ib, ob, の音節が四行続く。最後の10行は Lord's Prayer が印刷されている。アルファベットと主の祈りこそピューリタンの最小必要限度の教育エッセンスであったことがわかる。

当時の子供たちが hornbook を持って通学する様子が Samuel Sewall の1691年の日記に興味深く記されている。2才8ヶ月の息子の Joseph が初めて学校に行く時、いとこの Jane が一緒について行き、Joseph の hornbook を持ってやる⁽³⁾。John Locke は *Thoughts concerning Education* (1690) の中でイギリスの子供たちに読み方を教える方法は“the ordinary road of Horn-Book, Primer, Psalter, Testament; and Bible”と書いている。

Hornbook は元来はイギリスで16世紀に発明され George II の時代まで用いられた。アルファベットの前に十の印 (cross または criss-cross) がついていたので Christ's Cross-Row あるいは Cris Cross Row と呼ばれ“reading a cris cross row”といった⁽⁴⁾。そのような hornbook をイギリ

(2) Earle, *Ibid.*, p.79

(3) Earle, *Ibid.*, p. 122

(4) Paul Leicester Ford, Introduction to *THE NEW ENGLAND PRIMER* (Columbia Univ., Press, 1962) p. 24, Ford の論文は PRIMER の歴史について最もすぐれたものといわれる。この小論も彼の論文に負うところが多い。

スから持込んでもピューリタンたちは、そのままでは使用しなかった。十字の印を嫌ったピューリタン⁽⁵⁾の牧師がボストンに輸入されたホーンブックの cris-cross row を消した話も残っている。

IV

alphabet, easy syllables, syllabarium, ab, eb, ib, ob, ub など、それに Lord's Prayer をエッセンスとする形式の教科書は古くからあったらしい。15世紀に出たといわれるローマ教会の初等用



horn-book のレプリカ。Printed by Otto H. Miller at Thomas Tadd's Printing Shop.

(5) *Ibid.*, p. 24

“for feare least the people of the land should become Idolators”ピューリタンが十字の印を嫌った出来事として、John Endicott が英国王旗の赤十字を剣で切り裂いた事件が有名である。

読物 *The Enschede's Abecedarium* はアルファベットの他に主の祈りと Ave Maria、信仰告白を含んでいる。同じく上級用の書物が1490年に英語に翻訳されて“The Prymer of Salisbury use”として出版された。その後 Primer に類する各種の書物が現われ Henry VIIIの時代に王の命令により統制され、英国国教会の成立に向う過程の中で学校教科書としてよりも礼拝用マニュアルの性格を強め Book of Common Prayer の先駆になってゆく⁽¹⁾。

新大陸植民地においてはイギリスの horn-book や Primer の流れをくむ初等教科書として The New England PRIMER が特に有名である。植民の初期から150年間にわたり the school-book といえはこの書物を指すほどで、Paul Leicester Ford によれば300万部以上印刷され、何百万という人々がこの書物から読み方を学んだ⁽²⁾とある。

New England PRIMER の最初の版はいつ、誰によって発行されたか不明である。しかし極めて初期の発行者として Benjamin Harris の名があげられるのは定説になっている。Harris は元来 Charles 王の時代、ロンドンで印刷屋を開業し1676年から1681年頃まで tract や broadsheet を発行していた。*The Grand Imposter*, *The Mystery of Iniquity* など法王とジェスエット派を攻撃する文書も出した。1679年の *An Appeal from the Country to the City, for the Preservation of His Majesties Person and the Protestant Religion* を出したことが、当時カトリックに傾きつつあった王の政策に触れ500ポンドの罰金とさらし台に立たされる刑を受けた。その後新大陸に渡りボストンには1686年にやってきて“Coffee, Tee and Chuculetto”の店を開き1687年に印刷業を始めた。彼がアメリカに渡る直前に出した Protestant Tutor は New England PRIMER の歴史を考える上で重要な書物である。その中に Alphabet, Syllabarium, Lord's Prayer, Creed, Ten Commandments, The Poem of John Rogers とその火刑の絵, figures and numeral Letters、創世記から黙示録まで聖書66巻の書名が含まれていて New England PRIMER とほぼ同じ内容⁽³⁾のものだからである。

New England PRIMER についての最初の広告は1690年に Newman's News from the Star に次のように出てくる。

ADVERTISEMENT

There is now in the Press, and will suddenly be extant, a Second Impression of *The New-England-Primer enlarged*, to which is added, more *Directions for Spelling*: the *Prayer of K Edward the 6th*, and *Verses made by Mr. Rogers the Martyr, left as a Legacy to his Children*, Sold by *Benjamin Harris*, at the *London Coffee-House in Boston*⁽⁴⁾

1701年の広告では、

“Books Printed and Sold by B. Harris at the Golden Boar's-Head in Grace church St.,”

(1) Paul L. Ford, *Ibid.*, pp. 4—8

(2) Paul L. Ford, *Ibid.*, p. 19

(3) Paul L. Ford, *Ibid.*, pp. 12—16

(4) Ford, *Ibid.*, p. 17

“The New England Primer Enlarged; For the more easy attaining the true Reading of English. To which is added *Milk for Babes*.”⁽⁵⁾

これが大変よく売れたので他の印刷業者も Harris のものを真似て多くの版が出た。1700年、ボストンの書店 Michael Perry の目録には“28 Primmers” and 44doz, Primmers”⁽⁶⁾とある。書名も Thomas Green が New London で出したものは“A Primer for the Colony of Connecticut”, Henry de Foreest が New York で出した版は“The New York Primer”、その他“American Primer”, “The Columbia Primer”など様々だったが結局“The New England PRIMER”が最もよいタイトルとして定着した。

多くの出版者と、長い年月の間には New England PRIMER の内容に変化があった。しかしどの版も最初のページに大文字・小文字の Alphabet、続いて Easy syllables for children; ab eb ib ob ub…という様な表が3ページほど続く。その次は一音節から五音節、時には六音節の単語の表が数ページ続く。それぞれの音節の例としてあげられている単語の中でも一音節の God, clay, grace、二音節の Glo-ry、三音節の God-li-ness, Ho-li,ness、四音節の E-ver-last-ing、五音節の Con-so-la-ti-on など聖書からとったと思われる単語が目につく。

New England PRIMER といえば、これを指すと思われるほど有名な jingle, “In Adam’s Fall …”で始まる rhyming method of teaching the alphabet がその次に出てくる。二行から四行の、押韻する文の中に、A, B, C, D……の文字を含む語を文のはじめに置いて、アルファベットを覚えさせる方式であった。A B C…それぞれの文に、それを表わす木版画を伴っている。Ginn & Company 版のものを右に載せることにする。

アルファベット26文字のうちHの次はJになりIはない。またUの次はWになっていて24文字のみである。

文章の内容は150年の間に、あるいは版によって変化があったはずである。その中で初めから変わらないのはAの文字の“In Adam’s Fall We Sinned all”であった。これはカルヴィニズムの原点ともいべき原罪を表わすことばであるし、何よりも先に original sin を掲げたことにピューリタンの信仰の姿勢が推し量られよう。後に述べる SHORTER CATECHISM においては第13～第19問答でふたたびこの問題が取り上げられている。

時代によって見られる内容の変化を、筆者の手許の数版を比較したものが p.42 の表である。これをみるとAの項に変化がなかったのに対して、C, D, E は大きく変わっていたことに気付く⁽⁷⁾。1727年版に比較して1762年の版が一層宗教色を濃くしているのはなぜだろうか。国民の教科書は時の為政者の政策に影響を受けやすいことは歴史が示すところである。Ford によれば New

(5) Ford, *Ibid.*, p. 18

(6) Ford, *Ibid.*, p. 18

(7) New England PRIMER は数10種の版がある。ここでは、筆者の持っているわずかな資料の範囲内での比較である。しかし大体の傾向はこれによってわかるであろう。

(8) Ford, *Ibid.*, p. 29

England PRIMER の書き換えの著しいのは1740年～1760年であると指摘している⁽⁸⁾。それではこの間にニューイングランドの社会にどんな動きがあったのだろうか。信仰的な面の変化としては、17世紀後半からすでに初期ピューリタンの熱心さと確信が失われ、道義の退廃を嘆く“Jeremiad”の声があった。皮肉なことだが、神の召命に答えて勤労し繁栄すればするほど人の心が信仰から離れていったのである。合理的思想と相俟って Deism や Arminianism の攻撃もあった。ところが



In Adam's Fall
We sinned all.

Thy Life to mend,
This Book attend.

The Cat doth play,
And after flay.

A Dog will bite
A Thief at Night.

An Eagle' flight
Is out of fight.

The idle Fool
Is whipt at School.



As runs the Glass,
Man's life doth pass.

My Book and Heart
Shall never part.

Job feels the rod,
Yet blesses God.

Kings should be good
No men of blood.

The Lion bold
The Lamb doth hold.

The Moon gives light
In time of night.



Nightingales sing
In time of Spring.

Young Obadiah,
David, Josiah,
All were pious.

Peter denies
His Lord, and cries.

Queen Esther sues
And saves the Jews.

Rachel doth mourn
For her first-born.

Samuel anoints
Whom God appoints.



Time cuts down all,
Both great and small.

Uriah's beautiful Wife
Made David seek his life.

Whales in the Sea,
GOD's Voice obey.

Xerxes the great did die
And so must you and I.

Youth forward slips,
Death soonest nips.

Zaccheus he
Did climb the Tree
His Lord to see.

Rhymed Alphabet の 比較

Lenox Library 版 1727年
Boston: Printed by S. Kneeland & T. Green.

Boston:
1762年 発行

GINN & COMPANY 版(1785-1790年間の発行)
Boston: Printed by E. DRAPER.

A	In Adam's Fall/We Sinned all.	In ADAM'S Fall./We sinned all.	In Adam's Fall/We sinned all.
B	Thy Life to Mend/This Book Attend.	Heaven to find./The BIBLE mind.	Thy Life to mend./This Book attend.
C	The Cat doth play/And after slay.	CHRIST crucify'd./For Sinners dy'd.	The Cat doth play./And after slay.
D	A Dog will bite/A Thief at night.	The Deluge drown'd/The Earth around.	A Dog will bite/A Thief at Night.
E	An Eagle's flight/Is out of sight.	ELIJAH hid./By Ravens fed.	An Eagle' flight/Is out of sight
F	The Idle Fool/Is whipt at School.	The Judgment made/Felix afraid.	The idle Fool/Is whipt at School.
G	As run the Glass/Man's life doth pass.	As runs the Glass./Our Life doth pass.	As runs the Glass./Man's life doth pass.
H	My Book and Heart/Shell never part.	My Book and Heart/Must never part.	My Book and Heart/Shell never part.
J	Job feels the Rod/Yet blesses God.	Job feels the Rod./Yet blesses GOD.	Job feels the rod./Yet blesses God.
K	Our KING the good/NO man of blood.	Proud Korah's Troop/Was swallow'd up.	Kings should be good/No men of blood.
L	The Lion bold/The Lamb doth hold.	Lot fled to Zoar./Saw fiery Shower/On Sodom pour.	The Lion bold/The Lamb doth hold.
M	The Moon gives light/In time of night.	Moses was he/Who Israel's Host/Led thro' the Sea.	The Moon gives light/In time of night.
N	Nightingales sing/In Time of Spring.	Noah did view/The old world & new.	Nightingales sing/In time of Spring.
O	The Royal Oak/it was the Tree/That sav'd His/Royal Majestie.	Young Obadiah./David, Josias./All were pious.	Young Obadiah./David, Josias./All were pious.
P	Peter denies/His Lord and cries.	Peter deny'd/His Lord and cry'd.	Peter denies/His Lord, and cries.
Q	Queen Esther comes/in Royal State/To Save the JEWS/from dismal Fate.	Queen Esther sues./And saves the Jews.	Queen Ester sues/And saves the Jews.
R	Rachel doth mourn/For her first born.	Young pious Ruth./Left all for Truth.	Rachel doth mourn/For her first-born.
S	Samuel anoints/Whom God appoints.	Young Samuel dear./The Lord did fear.	Samuel anoints/Whom God appoints.
T	Time cuts down all/Both great and small.	Young Timothy/Learnt Sin to fly.	Time cuts down all./Both great and small.
U	Uriah's beauteous Wife/Made David seek his/Life.	Vashti for Pride./Was set aside.	Uriah's beauteous Wife/made David seek his life.
W	Whales in the Sea/God's Voice obey.	Whales in the Sea./GOD's Voice obey.	Whales in the Sea./GOD's Voice obey.
X	Xerxes the great did/die/And so must you & I.	Xerxes did die./And so must I.	Xerxes the great did die/And so must you and I.
Y	Youth forward slips/Death soonest nips.	While youth do chear/ ⁽⁷⁷⁷⁾ Death may be near.	Youth forward slips./Death soonest nips.
Z	Zacheus he/Did climb the Tree/His Lord to see. ⁽⁷⁷⁷⁾	Zaccheus he/Did climb the Tree./Our Lord to see.	Zaccheus he/Did climb the Tree/His Lord to see.

1830年代の末から再び信仰の火が激しくもえあがることになる。いわゆる Great Awakening がそれである。1834年12月に Jonathan Edwards がノーサンプトンの教会でした説教をこの信仰復興運動の出発点とし、その後約十数年間、宗教熱が植民地をおおうことになる。こういった事情が PRIMER の内容を宗教的に書き改めさせたのではないだろうか。

政治的な面の変化として見られる興味深い書き換えは、Kの項の King という語の扱いであるが、これについては後で取り上げることにする。

1727年版（以下 Lenox Library の Facsimile 版を L, L 版と称する）では Picture Alphabet の項目の次は The Dutiful Children's Promise があり、神を恐れ、国王と両親と年長者を敬い従い、友を愛し、人を憎まず敵を許し、敵のために祈る。また十戒を守り、カテキズムを学び、聖日を重んじるよう子供に求められた誓いが書かれている。ここで特にニューイングランド社会で重んじられた権威への尊敬と服従が注目される。両親への従順が重んじられ Children's Promise に続く An Alphabet of Lessons for Youth の項、まず A は“A wise son makes glad Father, but a foolish son is heaviness of his Mother”と繰り返し説かれる。

そのことをもっと明確に表わす文は SHORTER CATECHISM の第63問答で、ピューリタンの子供たちが守るべき道德律、十戒の第五戒がそれに当たる。“Q. Which is the fifth Commandment?” “A. The fifth Commandment is, Honour thy Father & thy Mother, that thy Days may be long upon the land which the Lord thy God giveth that”。しかしこれでも不十分であったのか、両親に対する子供の務めをさらに一項目設けている。DUTY OF CHILDREN TOWARDS THEIR PARENTS がそれであり、聖書の中から、両親に対する子の務めの個所を引用して載せてある。最初に Matt. 15, 4、次が Exod. 20, 12（十戒の第五戒）、Luke 15, 10（放蕩息子の悔い改め）、I Sam. 22, 3, Prov. 20, 20「自分の父母をののしる者は、そのともしびは暗やみの中に消える」、というようにして幼い子供たちの心に教えをたたき込んだのであろう。

もし道徳的に規制が困難とあらば法律に訴えてでもこの秩序を維持しようとした。17世紀半ばに、親に背き反抗する子供に対し死刑をもって臨むべし、という法案がマサチューセッツ議会で審議されたほどである⁽⁹⁾。

An Alphabet of Lessons for Youth においても K の項目には注目すべきであろう。なぜなら、この項にピューリタン社会のもうひとつの特徴というべき「勤勉」の精神がみられるからである⁽¹⁰⁾。K の項は“Keep thy Heart with all Diligence, for out of it are the issues of Life”。

L の項は Liars、M は Many、N は Now で始まる文が Z まで続くが、そのすべてが聖書からの教えからきている。

L.L. 版は Alphabet Lesson の次に The LORD's Prayer, The CREED, The Ten Commandments、そして両親への服従に関連して前に述べた DUTY OF CHILDREN

(9) R. F. バッツ著、渡辺 晶ほか訳『アメリカ教育文化史』（学芸図書、昭和52年）p. 75

(10) Benjamin Franklin's *Autobiography* の thirteen names of virtues の第 6 virtue に “Industry” があげられていることに注目。

TOWARDS THEIR PARENTS, The Names and Order of the Books of the Old and New Testament、その後に聖書の Chapter や verse を示すローマ数字、アラビア数字、その英語の表記が並べて書かれている。

数字の次は John Rogers の殉教物語が続く。一世紀半の長きにわたり New England PRIMER には多くの版が出され、内容に変化があったことは前に述べた通りである。筆者の見た範囲のわずかの資料からもこれらの変化は十分に推しはかることができる。しかしその変化にもかかわらず、いずれの版にも含まれているのは、この John Rogers の殉教の詩である。詩もさることながら、それに添えられた版画はピューリタンの子供たちに強烈な印象を与えたはずである。メリー女王(Queen Mary)によって火炙りの刑に処せられた John Rogers が燃え盛る火の中から、乳呑児を胸に抱いた妻と 9 人の幼い子供たちに最後の勧めをしている図が描かれている。その図の説明文は Mr. Rogers, Minister of the Gospel in London, was the first Martyr in Q Mary's Reign, and was burnt at Smithfield, February the fourth, 1554. His wife with nine small children, and one at her Breast, following him to the stake, with Jesus Christ :

Ford の研究によれば上の文は事実と多少異なっているという。Rogers は妻帯をしない聖職者であった。しかるにその誓いを破り妻を娶ったので、就任する時に考え直すように女王が迫ったが Rogers はそれを拒み、その結果一年以上投獄された後 1554 年 2 月 4 日 (New Style の歴の 14 日) に火炙にされた。しかし妻子は処刑場には居なかったとのことである。子供の数についても、乳呑児を含めて 9 人とする版と 10 人とする両方があるらしく “nine small children and one at the breast” を出版者がどちらに解釈したかによるものであろうと述べている。Rogers の裁判記録には、はっきり 10 人と答えた、と Ford は記している⁽¹¹⁾。

内容は Rogers が死の数日前に、子供たちに書き記した勧めのことばである、との書き出しで始まる 7 ページにわたる詩である。その勧告は、神を中心として信仰を守り、日常生活においては十戒に従い、母を助け敬うこと。貧しい者に心を配り、身を清く保ち神の宮とすること。罪の中に生まれた自分は十字架の血の贖により救われた者である。今しばらくの苦しみも神と共にあるのであるから死を恐れない。天国で再び会う日まで日々子供たちが神に守られるように祈る、という内容である。

V

L.L. 版の最後の項目は THE SHORTER CATECHISM で分量も書物全体の半分を占め、内容の上でも PRIMER の中心である。この教理問答は Agreed upon the Reverend Assembly of Divines at Westminster とあることからわかるように、ロンドンの Westminster 寺院に英国議会(Round-Head Parliament)の招集によって神学者が会議して作られたもので、Westminster Assembly's Shorter Catechism と呼ばれているものである。会議は 121 人の神学者、30 人のレイ

(11) Ford, *Ibid.*, pp. 32—37

マン、スコットランドから5人の代表、それに一般陪席者を加え、1643年7月より1649年3月までに1163回の会議が開かれた。会議は信仰告白、大および小教理問答、その他の文書を作成した。SHORTERのタイトルはlargerと区別するためのものであり、内容的にカルヴィン主義信仰の要約といわれる。大教理の問答が196あるのに対し小教理の方は107、また大教理の方のAnswerは100語に及ぶ長いものもある。

元来PRIMERという書物は学校教科書としてではなく祈禱書として始まったものといわれる。それがやがて文字の教授と結びつき、1670年にQuaker教徒のためにGeorge Foxeの編んだ“Primer and Catechism”のような書物に変化していった。学校制度がなかった時代に、文字を教えることと併わせて、それぞれの宗派の教義の根本をくり返し諳誦させる利点を彼らは見つけたのであろう。ピューリタン達は植民地で子供たちに対しどのcatechismを教えるべきか、大きな問題に直面した。Arbella号上で聖日ごとに行なわれた教理問答は恐らくはWilliam Perkinsのものが用いられたものと思われる。カルヴィニズムに基づいたPerkinsのcatechismは1590年に初版が出てから版を重ね、アメリカでもJohn Robinsonが改訂したもののリプリント版がPilgrim Fathersのために用いられたらしい。

マサチューセッツ湾植民地が開かれた10数年後、General Courtが出した法令は、タウンの長老が子供たちの信仰を養うためにカテキズムを教えるようにとの要請であった。その時ピューリタン達はCongregational Churchを唯一の教会、Congregationalismを国教とするためのカテキズムの必要に迫られた。1641年－1684年の間にJohn Cotton, John Eliot, Thomas Shepard, Richard Mather, John Nortonその他あまりにも多くの牧師によるカテキズムが現われ、そのために教会内部に分裂が生じそうになった。このような情勢の時にピューリタン達はこの危機をWestminster SHORTER CATECHISMに共通の信仰を見出し分裂を防ぐことに成功した。New England PRIMERが出版されたのはこの少し後のことであった。ウエストミンスター教理問答がNew England PRIMERの中にすぐ採り入れられたかどうかはFordの研究でも不明であるが、18世紀のPRIMERにはどの版にも含まれているとFordは言っている。また18世紀に出たPRIMERにはWestminsterのそれに対し、第二教理問答、あるいは“The Catechism of NEW ENGLAND”と呼ばれるJohn Cottonの“Spiritual Milk for American BABES”も加えられている。

SHORTER CATECHISMの第一問は“What is the chief End of Men?”と人間存在の意味を問題としている。そして人がこの世に誕生した目的は「神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶこと」“to Glorify God, and Enjoy Him”の答が用意されている。この目的を達するために神は人間に聖書を与えられ、聖書の中に人が信ずべき神について、また人の義務について述べているというのである。第4問からは神の本性について述べ、自分たちの信ずる神は“a Spirit, Infinite Eternal, and Unchangeable, in His Being Wisdom, Power, Holiness, Justice, Goodness and Truth”と答える。そしてまた、父・子・聖霊の三位一体の神である、と。

第7から11問は神の創造と摂理(Providence)の教えとして、ニューイングランドのピューリタ

ンに大きな影響を与えた。神は宇宙を創造し、支配しているゆえに、天災地変もまた人間の罪に対する道徳的審判であると信ずるのである。彼らは地震や、牛が洪水で流されることにも神の意志としての怒りのあらわれと見るのである。摂理の恩恵もピューリタンの多くの記録に見ることができる。John Winthrop の *JOURNAL* の中からその例を紹介するならば、1640年12月15日の記事は摂理を信ずるピューリタンの態度を示す興味深い出来事であろう。穀物部屋に100冊あまりの本と一緒にギリシャ語聖書と詩篇と Anglican Church の Prayer Book を合本にした書物を置いたところ、そのうち祈禱書の部分だけが一ページ残らずねずみにかじられてしまったというのである。Anglican Church に対する神の意志のあらわれと受取ったのであろう。ものひとつの記事は1648年8月15日に見られる。それはケインブリッジで開かれた宗教会議の席に一匹の蛇が紛れ込んできた。一人の牧師が杖でそれを殺した。Winthrop はこう結論づける“…and nothing falling out but by divine providence, it is out of doubt, the Lord discovered somewhat of His mind in it. The serpent is the devil; the synod, the representative of the churches of Christ in New England.”そして彼は続けて「悪魔が以前も最近も人々を動揺させ、破滅させようとしたが、人々の信仰によって悪魔を打ち負かし、悪魔の頭をたたきつぶした(crushed his head)」⁽¹⁾と書いている。

第12から19問答は、カルヴィニズム信仰の中心である原罪についてである。PRIMER の中ではすでに Picture Alphabet の個所で述べたように“In Adam’s Fall We Sinned all”のリフレーションとしてここで再度教えられる。のちの時代の PRIMER には John Cotton の American BABES が加えられるが、そこでは次のような問答でこの問題を繰り返す

Q Are you then born a Sinner?

A I conceived in Sin & born in Iniquity.

Q What is your Birth Sin?

A Adam’s Sin imputed to me, and a corrupt Nature dwelling in me.

Q What is your corrupt Nature?

A My corrupt Nature is empty of Grace, bent unto Sin, only unto Sin and that continually.

この後に十戒が続き次の問答で締め括られる。

Q Whether have you kept these Commandments?

A No, I and all Men are Sinners.

このようにして人間が罪の中に生れ、その本性は罪であると強調した。

さらに罪の払う報酬は死と地獄であると教える。罪と罪の結果として、救われずに地獄に落ちる恐怖は幼い子供たちの心を昼も夜も苦しめた。子供たちの脅え泣いた姿が記録に残されている。ピューリタンの日常生活を伺い知る記録として前述の Sewall の日記が有名である。その中に罪

(1) John Winthrop’s *JOURNAL*, Edited by Perry Miller, *THE AMERICAN PURITANS -Their Prose and Poetry*, (New York, Doubleday & Company, Inc. 1956) pp. 47—48

と地獄の恐ろしさが彼の14才の娘にとっていかに大きかったかを描いた出来事が記されている。1695年1月のある日 Sewall が夜帰宅すると玄関に妻が出迎える。彼女の話によると、家族の者は皆 Betty のとった行動にビックリしたという。Betty が夕食のすんだ後でワーと泣き出しそれにひきずられて皆も泣き出した。母親が理由を聞いても何も答えない。しかし最後に、Betty は罪が許されないまま地獄に落ちなくてはならないと思い込んでいることがわかった。Norton 牧師の“Ye shall seek me and shall not find me”という説教を彼が読んで聞かせたのが恐怖心を起こさせた原因とわかったという⁽²⁾。

このように子供たちの心を罪と地獄の恐怖によって支配させようとするピューリタンの児童観では、子供を悪に満ちた存在と見なした。子供たちは回心する機会が少ないだけに大人よりも悪い存在と考えられた。Jonathan Edwards は子供を“young viper”と呼び、厳しく訓練しなければ eternal burning に曝すことになるとうまで言っている。子供の行動の中に Adam's Sin を見る記録が、これも Sewall の日記に残っている。1692年11月6日、息子の Joseph が真鍮のボタンを投げたところ、それが姉の Betty の額に当たり、出血した。Sewall が息子をはげしく叱った。祖母が呼ぶ声がするのでその部屋に行ってみると息子がゆりかごの影にコソコソと隠れるところであった。その息子の態度の中に、禁断の園で神の目を逃れようとして木の陰に身を隠すアダムの子孫の罪を思い浮かべ悲しくなった、と記している⁽³⁾。

SHORTER CATECHISM の第20～38問答は「アダムが犯した罪が彼の子孫である全人類に及んでいる。その罪と墮落の中にいる人類に対し神の一方的な恩恵により人間の姿をとったイエス・キリストを下さった。贖い主としてのイエスと救済のための神の意志を、ことばによって伝えるために神は聖書を人類に与えられた」というのがその内容である。

その中で問20は重要である。

Q Did God leave all Mankind to perish in the estate of Sin and Misery?

A God having out of his meer good pleasure from all Eternity, Elected some to everlasting Life, did enter into a Covenant of Grace, to deliver them out of the state of sin and Misery, and to bring them into a state of salvation by Redeemer.

全人類を滅びのままにさせておくのではなく、ある人々を永遠の生命に選び分けられた。裏を返せば、その選抜に入れられない人々は永遠の滅びが予定されているということになる。しかもこの選びは一方的な神の計画であって人間の伺い知るところでないし、また努力や善行も救いに何の役にも立たないという。この教えがニューイングランド、ピューリタンを支配した「予定と選び」“predestination and election”であった。

そこで植民地の人々の最大の関心事は「どうすれば自分の救を確かめ得るか」ということであった。Max Weber によれば「すぐれた宗教家が自己の救われていることを確信しうるのは、自分

(2) Alice Morse Earle, *CUSTOMS AND FASHIONS IN OLD NEW ENGLAND*, (Rutland, CHARLES TUTTLE COMPANY, 1965) p. 11

(3) Earle, *Ibid.*, p. 14

が神の容器と感ずるか、或いはその道具と感ずるか、その何れかなのである。前者のばあいには彼の宗教生活は神秘的な感情の培養に傾き、後者のばあいには禁欲的な行為に傾く。ルッターは第一の類型に近く、カルヴィニズムは第二の類型に属するものであった」。ウェーバーはさらに続けて「信仰が『救いの確かさ』の確実な基礎として役立ちうるためには、それは客観的な働きによって証明されなければならない。つまり信仰は *fides efficax* 〈有効な信仰〉であることを必要とし、救いへの召命は *effectual calling* 〈有効な召命〉—ザヴォイ宣言の表現—であるのを必要とする⁽⁴⁾」。ニューイングランドのピューリタンはまさに禁欲的に職業に励み、それによって繁栄するならば、それは神の恵みの兆しとして召しに答えることであり、神との契約(*covenant*)関係に入るものと考えた。すなわち恵みの契約(*covenant of grace*)である。イエス・キリストの贖いはこの契約に与かる者たちだけのものであり、回心してイエス・キリストを受け入れることにより永遠の命に入れられる。人間はアダムの罪のゆえに神に対する業を行う能力を失ってしまったのであるが、恵の契約に与かった者にはそれが再び与えられる。このような教えに立ってピューリタンは業の契約を守っているかどうか自分をたえず点検しつつ勤労と善行に励み救を確認したのであった。植民地時代に書かれたおびただしい日記のたぐいはピューリタンの救いの自己点検の記録であるといわれる。

彼らはまた日々の生活上の指針を十戒(*Ten Commandments*)に求めた。問答第40～81はピューリタンが神に対する義務としての道德律が述べられている。第45問から第62問は第一戒から第四戒で、神に対する戒め、その中に第57問答に安息日の厳守がふれられている。17世紀半ばのマサチューセッツでは教会の礼拝欠席者には罪金、その他聖日の過ごし方について細かい規定をしていた。第63問は前に触れた十戒の第五番目のいましめである。ニューイングランドのピューリタンは第五戒“*Honour thy Father & thy Mother*”の解釈を拡げ“*preserve the Honour & perform the Duties belonging to every one in their several Places and Relation, as Superiours, Inferiours, or Equals*”とし、家庭の父母だけでなく学校の教師、教会の牧師、そして植民地の統治者に対し尊敬と服従させることを強調し、国家の秩序を保とうとしたのである。第82番目の問答から97番までは神の戒を守ることの出来ない人間の現実とイエス・キリストによる救い、聖礼典についての教えである。そして *SHORTER CATECHISM* の最後は主の祈り(*Lord's Prayer*)でしめくくられている。

以上、1727版の *The New England PRIMER* の内容を述べた。

それではこのような教科書が子供たちにどのように教えられたのであろうか。子供の本性は悪であるというピューリタンの児童観にたって、そのような幼い罪人を *spoil* させないためには鞭(*rod*)を用いるしかないと考えた。Cotton Mather は“…when they grow up, you have no way to Save them from the dreadful Wrath of God, if you do not Catechise them in the Way of

(4) マックス・ウェーバー、梶山、大塚訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(下)(岩波書店) p. 55

(5) Ford, *Ibid.*, p. 39

Salvation⁽⁵⁾”と述べている。4・5才の子供にも家庭と学校と教会で教理問答が教えられ、正確にくり返すことが要求された。そこには子供特有の心理条件などはまったく考えられる余地がなかった。教会においては夏期3回の日曜日の午後が“Saying the Catechism”に当てられた。牧師が講壇から誦誦会の予告を告げる、“Sabbath after next the first division of Catechism will be recited here”。当日が来ると地域の8才から15才までの子供が晴着を着て会に集まってくる。教会堂の通路の片側に男の子、反対側に女子が並び、説教壇の下に長老が座わる。発せられる問に問答書通り一語も間違わずに答えなければならない。子供たちは次々に脱落し、第三の日曜日には長い難問が、まだ残っている最年長の子供たちに問われる⁽⁶⁾。

学校においても教会と同様に厳しく文字の綴り、教理問答が教えられた。綴り字の教え方は、教師が机をたたくむちの音にあわせてアルファベットの文字を合唱するやり方であった。たとえば spelling という綴りを教えるには spell, s. p. e. l. l.—ing, i. n. g.—s. p. e. l. l. i. n. g, spelling と覚えさせたという⁽⁷⁾。

家庭で教理問題を教えるのは父親の務めであった。日曜日の朝、家族を集めて祈りの時をもちその最後に子供たちに教理の問答をする。牧師が各家を訪ねて子供に教理問答をして、親が忠実にピューリタンの務めを果たしているかどうかを調べる習慣がニューイングランドには残っていたという⁽⁸⁾。

このように catechism を中心とした The New England PRIMER をニューイングランド聖書共和国のいわば国定教科書として、“young viper”と呼ばれる子供たちを New England Puritans に育成していったのであった。

VI

17世紀末から19世紀中ばまでの150年の間に The New England PRIMER の内容に変化があったことはたびたび述べてきた。小さな項目の書き換えや入れ換えは別として、18世紀以降の版の改訂の中で加えられた項目に John Cotton の教理問答“Spiritual Milk for American Babes, Drawn out of the Breasts of both Testaments, for the Souls Nourishment”がある。ボストンの有力な牧師であった John Cotton が1640年代に書いたものを、のちに The New England PRIMER に採り入れたものであった。内容的には SHORTER CATECHISM と重複することが多いが、SHORTER よりも簡潔で、問答の数も約半分の64にすぎない。“Quest. What hath God done for you?”というように直接「あなたは……?’という問いかけをしている点で、SHORTER CATECHISM (Westminster Catechism)の「非人格的設問形態」と形式を異にしている特徴があるだろう。

もうひとつ初期の版になかった項目“A Dialogue between CHRIST, YOUTH, and the Devil”

(6) Clifton Johnson, “The New England Primer,” *NEW ENGLAND MAGAZINE*, p. 333

(7) 梅根 悟, Ibid「教育におけるピューリタニズムと『左翼』プロテスタンティズム」p. 281

(8) Clifton Johnson, “Magazine of New England History,” *NEW ENGLAND MAGAZINE* p. 35

が加えられている。それは愚かな若者の次のような言葉で始まる。

YOUTH.

THOSE days which God to me doth send,

In pleasure I'm resolv'd to spend,

(中 略)

In sports and plays to spend my time

Sorrow and grief I'll put away,

Though parents grieve and me correct,

Yet I their counsel will reject.

すると悪魔がそれを聞いて喜んで、

Devil.

(中 略)

If thou my counsel wilt embrace,

And shun the ways of truth and grace,

And learn to lie, to curse and swear,

And be as proud as any are ;

And with thy brothers wilt fall out ,

And sisters with vile language flout.

Yea, fight and scratch, and also bite,

Then in thee I will take delight.

CHRIST が著者に悪魔の誘惑に負けないように説得する。著者の気持は揺らぐがどうしても決心がつかない。最後に死が登場する。

Death.

Youth, I am come to fetch thy breath,

And carry thee to th' shades of death,

No pity on thee can I show,

Thou hast thy God offended so.

Thy soul and body I'll divide,

Thy body in the grave I'll hide,

And thy dear soul in hell must lie

With Devils to eternity.

この対話を読む時に、初期の峻厳なカルヴィニズムのものと多少異なった印象をわれわれは受ける。それは YOUTH が咎められている事柄の内容に変化が見られるためではないだろうか。上に引用した YOUTH および Devil のことばから、カルヴィニズムの教義そのものより、むしろそれから派生する日常的な道徳に焦点が移っているように思われるからである。

The New England PRIMER の初期の版と後の時代のものに見られる違いの第一は上に述べた点にあると思う。つまりピューリタン倫理的な項目が新たに加えられ、前から残っているものも、そのような内容に書き換えられていった傾向が見られる。たとえば GINN & COMPANY 版 (1785~1790) に加えられた“Duty to GOD and our Neighbours”のように隣人愛を教える内容に変わっていったのである。PRIMER ではないがこの時代に Cotton Mather の *Bonifacius* が広く読まれたのも同じ理由によるものであり、Benjamin Franklin をして“…That the most acceptable service we render to him is doing good to his other children⁽⁹⁾”といわせたことにもピューリタニズムの変容のあらわれを見ることができよう。

新しい傾向の第二番目は英本国との関係が独立革命をはさんで大きく変わった点である。早い時代の PRIMER の Alphabet Lesson の K の項では英国王を誉め称え“*Our King the good/No man of blood*”であった。Charles 一世の時代には“*King Charles the Good/No Man of blood*”という版もある。この英国王への忠誠も革命期が近づき、関係が悪化するにつれて“*King should be good/No man of blood*”と変わり、1797年版ではついに“*The British King/Lost states thirteen⁽¹⁰⁾*” (Philadelphia 版) とまで変わってしまった。1799年の版では英国王ではなく“*Proud Korah's troop/was swallowed up*”と旧約聖書のレビ人の王になっている。独立革命を境に PRIMER の口絵が英国王に代わってアメリカの愛国者、Washington や Hancock が載せられるようになった変化も同じ理由によるものと考えられる。

第三番の特徴は新しい版には自然や動物に関する項目がわずかではあるが加えられた点が目につく。たとえば nightingale の木版画が載せられ“*The NIGHTINGALE, The Nightingale doth sweetly sing, To welcome in the cheerful Spring*”の説明文が加えられている。The BUTTERFLY, *The Butterfly in gawdy Dress,/The worthless Coxcomb doth express*”。1885年頃の E. Draper 版には農夫の姿を描いた木版画とともに自然や自然科学への関心の萌芽が見られ、後世の本格的学校教科書たとえば Noah Webster の *Blue-backed Speller* などへの橋渡になったものと思われる。

参 考 文 献

- 大下尚一編『ピューリタニズムとアメリカ』(南雲堂、1971年)
- 大下尚一『ピューリタニズム』(研究社、1976年)
- R. W. ホートン/H. W. エトワーズ、関口、白石訳『アメリカ文学思想の背景』(小川出版、昭和47年)
- 川崎 源著『ホレース・マン研究』(理想社、昭和34年)
- 榊原康夫訳『ウエストミンスター小教理問答書』(聖恵授産所出版部、1982年)
- 春名寿章著『小教理問答講解』(聖恵授産所出版部、1982年)
- Dudley, Lavinia ed, *The Encyclopedia Americana*, (New York, Americana corporation, 1962)
- Mussey, Barrows, *OLD NEW ENGLAND*, (New York, A. A. WYN, Inc., 1946)

(9) “A letter from Franklin to Ezra Stiles”, quoted by Mildred Silver in *A Brief History of American Literature*, (Taibundo) p. 77

(10) Ford, Ibid, pp. 27—28